

平成25年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	豊田市立崇化館中学校	氏名	伊藤 実知子
-----	------------	----	--------

1. 印象に残る写真2点

●「これぞアフリカ！これぞガーナ！」



ガーナの活気あふれる道端での光景。頭上に物を載せて行き来する人々、たくさんの車や道路の両サイドにあるパラソル売店。とにかくエネルギーに生きていることが伝わってきた一枚。

●「子どもたちと一緒に撮影！」



アカチの小学校で... 規律の整った授業時とは全く違って、カメラを向けると「イエ〜〜〜ィ！！」と入ってくる子どもたち。写真を撮るたびに、子どもたちにもみくちやにされました。ガーナの子供たちとココロが通えたひとときです。

2. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

「ガーナの子どもたちの児童労働の現実とチョコレートの飲食有無」についての真実。そして「日本の学校とガーナの学校の同一性と相違」について知ることが現地研修での個人的な目的だった。それを達成させるために、事前研修のなかでチーム別教材化計画を決めていったことは、非常に助かった。現地に行ってみると自分一人では知り得ない情報など、みんなで共有することにより目的達成の一助になったと思う。

少なくとも私たちが視察した地域において児童労働やチョコレートを食べたことのない子供はいないらしい。ただ全く児童労働がないわけではなく、奥地へ行けば児童労働が存在する事実も否認できない。なぜならガーナ政府として国を挙げて児童労働を排除しようとする活動を行なっているという事実もあるからだ。ガーナの

教育長、生徒、JICAの方々、伊藤忠商事の方、様々な方からお話を聞くことによって、自分自身納得のいく答えを得ることができ、これを日本に持ち帰り生徒に伝えることで、研修の目的は達成されるのだろう。

3. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

（1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

飛行機から見たガーナの夜景が本当に美しかった。インフラ整備が不十分だと聞いていた分、どこまでも広がる光の景色は感動的なものだった。空港に降り立つとたくさん走っている日本車。特に豊田出身の私にとっては、TOYOTAのロゴを見るだけで親しみを感じることができた。初めのうちは話しかけてくるガーナ人に対して警戒心満載だったが、徐々にガーナを知るにつれ、彼らがとても親切であり、私たちに興味を持ち話しかけていることを知った。ガーナの人々の屈託の無い笑顔と、何に対しても受け入れてくれる寛容な心に親しみを感じることができた。レストランでの食事提供までの時間は、「ガーナではガーナの時間の流れがある」と自分自身も寛容な心を持ち待つことができるようになった。

（2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

アクラ市内を走る車の半数近くが日本製の車に見えるほど、トヨタ、ホンダ、日産、三菱などのたくさんの日本車が走っていた。アクラ市内を見る限り、車社会なのかと思わせるほど日本と同じようにあちこちで渋滞も起こっていた。広告用の看板に力士の格好をした曙が起用されており、街のいたるところで日本とのつながりを感じるものを発見した。学校での授業形態は座学が多く、（内容や環境は違うが）日本の中学校での授業風景と似ていると思った。妙に規律が整っており、躰が良く、授業での反応や流れに画一性を感じた。

天水稲作プロジェクトでの田園風景を初め、バスでの移動中に車窓から見る林の景色は、日本の風景と変わらないところもあり、懐かしささえ感じた。

（3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

ガーナに限らず、正しい教育を受けることの重要性を再認識した。今回の研修で20歳の小学1年生がいることを知ったり、18歳の小学6年生に会うことにより、何歳からでも教育を受けることが可能なガーナという国。日本でも年齢に応じた子供だけで学年を構成するばかりでなく、実力に応じた学年で学習できる環境提供が大切であると考えさせられた。その一方で貧困や怠学など様々な理由により教育が受けられない、受けようとしらない子供の存在は日本にもガーナにもあり、これを改善するためには保護者や地域社会への働きかけが重要になってくる。しかし国民性からか、ガーナの人々の何でも受け入れようとする寛容な心がこんな場面では障害になってくるのであろうか。そんな中、青年海外協力隊として活躍される大橋みぎはさんの「ガーナの教育事情を変えよう！」とする意気込みは圧巻だった。

4. JICAの国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

モノや資金ではなく技術提供に重点を置き、国際協力事業終了後も自助努力で続けていけるように、現地のもthingを利用し、現地の人々と共に活動することにより、事業を持続可能にしているところ。そして一方的に支援するのではなく、選択肢としての技術提供であり、選択決定、実行するのは現地ガーナ人次第というスタンス

で取り組んでいるところが良い!と思った。また無償支援の意義を今回の研修でしっかりと理解することができた。長い目で見て将来日本の技術の素晴らしさが相手国に伝わったときに、Win-Win の関係になることも知った。先々のことまで考え、取り組んでいる JICA 国際協力事業は素晴らしいと思った。JICA の活動がもっと多くの人々に認知・評価されるように、私たち教師が次代を担う子供たちに伝えて行くことが大切であると感じた。そのためにもこの教師海外研修は今後も続けていって欲しいと思う。

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

24 時間身に付けていられる蚊よけリングは必ず持参したほうが安心だと思いました。蚊除けリングを持っていかなかった私は、携帯ベープ2台と虫除けスプレーを手や足にかけていましたが、虫よけスプレーの効果は数時間で、思うように追加スプレーできないときもあり少し不安でした。結果的に蚊に食われることはありませんでしたが、ホテルの部屋で蚊と共に過ごした2日間は、恐怖であまりよく眠れませんでした。

事前研修で学びの準備はしていくものの、現地では相手があるため臨機応変に対応することが重要になってきます。聞き取り調査や写真を撮ってくる計画を立てたものの、自分自身が興奮してしまっているの、思うように上手く収集できていなかったこともありました。みんなでのデータ共有はとても有効であるので、自分自身も気づく限りの収集をするように心がけることが大切です。

ガーナ現地の教師と話をしたときに、日本で使用している教科書や学校の生活風景の写真に興味を持ってくれたので、持参することをお勧めします。

6. その他全般を通じての感想・意見など

ガーナという日本から遠く離れた国で様々な活動をされている日本の人々にお会いすることで、私自身とても良い刺激を受けることができた。ガーナについて教師から生徒に伝えるとき、自分自身が見聞きしてきた体験は、間接的な体験として生徒への影響も大きく違ってくると思う。

黄熱病予防のイエローカードを持ち、マラリアに気を遣いながらのガーナ滞在は緊張することもたくさんあったが、一方で治安面では比較的安全に感じた。車窓からみる人々の生活には活気があり、希望を持って一生懸命生きようとしている彼らの姿には感動さえした。

私自身もあまり深く知らなかったガーナという国。豊富な資源の宝庫として、将来発展の可能性が秘められており、世界からも注目されている。ガーナ行きの飛行機では建築のボランティアでやって来たイギリスの高校生、カクムナショナルパークでは1年の任期を終えたドイツ人ボランティア学生などと一緒になった。多くの中国人の話も聞いた。ガーナは様々な国から支援を受けているようだ。そんな中、日本は現地の雇用や生活水準の向上に貢献し、長期的な信頼関係を築くやり方で支援している。私たちが日本人だと知るとガーナの人々の対応が変わるくらいだった。それだけ JICA 始め日本企業がガーナで果たしている役割は大きいのだと感じることができた。このようなことを含め、世界から見る日本の立場というものを、これから是非生徒に伝えていきたいと思った。

以上